師範教育

文法教科書

巻一

375.9
Ya13
資料室

42565
教科書文庫
4
815
51-1911
20000
26610

資料室

375.9
Ya13

明治四十四年二月二十三日
文部省檢定濟

山田孝雄著

師範教育 文法教科書

東京
大阪 寶文館藏版

廣島大學圖書之印

廣島大學 教 26610 圖書

例言

一、本書は師範學校に於ける國語文法教科書として明治四十三年五月三十一日文部省令第十三號師範學校教授要目によりて編述したるものなり。

一、本書編成の方針は全く教科書組織にして必しも文典の順序に依らずその所說相連關して環の如く、或は分解より綜合に進み、或は綜合より分解に及ぼし、最後には必綜合的の事實を置き以て全體の知識を歸結しうるやうになせるものにして各卷皆この組織をとれり。この故にこの點より見れば、本書は悉く環狀教案の組織をとれるものなり。然れども文法上の事項は頗複雜にして錯綜せるものなれば、終に至るに從つて事項を加へ、又は詳細なる說明を施したり。されば、この點より見れば本書は段階教

案の組織をとれるものといふべし。

一、本書は之を三卷に分つ。卷一は誘導篇として豫備の智識と文法の概略とを授くるを目的とし、單語論の概略と句の組立の大要とを授けて、以て文法の概念を授くるを主眼とせり。卷二は單語論として活用に關する大體の智識を確實にせむことを主とし、之に關聯しては句の組立の重要なる目を加へたり、以上二卷のみにても亦大體完結せる教科書たるを得るなり。卷三に至りては普通文法全體に亙りて組織的の智識を與へて普通實用の文の法則に關する知識を確實にせむと期せり。以上すべて現在普通の文に關する法則を主とし現時談話語に關する事實を參照して說きたり。これ普通教育としてこの種の智識の的確明瞭ならむことを急務と信ずればなり。

一、本書は著者の實驗上の成蹟と多少の研鑽とに基づき、現時の教育に剴切なる諸の要點を逸せざらむことを期せり。その分量程度の如きは過度の勞を生徒に感ぜしめ、若くは生徒をして與し易しと侮らしむるが如き輕卒なる說明竝に課題なからむことを信ず。

一、各章問題及練習を設く。これ既授の智識を鞏固にし、之を復習するに止まらずして之を應用擴張せしめむが爲のものなり。故に既授の事を基礎として知りうべき新しき事實をも學ぶやうにせり。されば問題及練習は應用にして同時に授與の一部なり。この點は教授者諸君の活用を希ふ所なり。

一、實例及練習題は著者の特に苦心したる所にして生徒の學力に適應せしめむを努めたり。その最大部分は小學校國定教科書及落合芳賀藤岡吉田諸氏の讀本より各學年相當のものにつきて選擇したり。その他の大部分は普通學教科書(數學、博物、地理、歷史、

等)より取り從來の文法書に載せたる例及著者の考案によれるものは止むを得ざる場合に限り、その數極めて僅少なり。

一、本書は各卷隔週一時間の教授時數にて完了しうるものとす。若毎週一時間の教授をなさむとせば二卷を一學年に配當するを可とす。卽本科第一部第一學年に卷一卷二、第二學年に卷三を課しうるやうに編成せるものなり。

一、本書使用上注意を請ふべき體裁上の要點は鼇頭に要目を摘記せしこと練習題の文字を大にせしこと。表解を附錄として加へ復習の便に供せしこととこれなり。これらの事、一に皆この書の內容授受の際の便を計りしものなり。

師範教育

文法教科書 卷一目次

第一章 單語……一
第二章 名詞……四
第三章 數詞……八
第四章 代名詞……一〇
第五章 體言と用言……一五
第六章 形容詞……二一
第七章 動詞(一)四段活用……二七
第八章 動詞(二)一段活用……三一
第九章 動詞(三)二段活用……三五
第十章 動詞(四)三段活用……三九

第十一章　動詞(五)變格活用……四二
第十二章　助動詞……四七
第十三章　助詞……五六
第十四章　副詞……六一
第十五章　接續詞……六四
第十六章　感動詞……六六
第十七章　連語と句……六九
第十八章　句の組合はせ……七五
附錄
表解

師範教育 **文法教科書** 卷一目次終

言語
文字
文章
國語
國文

師範教育 **文法教科書** 卷一

山田孝雄著

第一章　單語と句

一　人の思想を聲音にてあらはせるものを**言語**といひ、之を**文字**にて書き綴れるものを**文章**といふ。言語は各國必しも同じからず。國語國文とは國民が自國の言語文章を呼ぶ名稱にして、我等は日本語をさして**國語**といひ、從つて日本文をば**國文**と稱するなり。

二　言語と文章とは元來同じかるべきものなるに、談話に用ゐるものと、文章に用ゐるものと、多少、法則の異なる場合

話語（又口語ともいふことあり）
文語
文法
文法學
單語
句

ありぃかゝる時は主として談話に用ゐる方の國語をば**話語**といひ、主として文章に用ゐる方の國語をば**文語**といとふ。

國にては話語と文語とは稍區別あるなり。國語の法則を我**文法**といひ、之を研究する學問をば**文法學**といふ。

三　文法にてはすべて一つ一つの語をば**單語**稱ふ。一つ一つの語とは次の如きものなり。

(イ)これ　は　梅　の　花　だ　（單語、六）

(ロ)野　に　は　雲雀　の　聲　かまびすし。（單語、七）

四　又幾つかの單語を集めてある思想をあらはせるものを**句**といふ。次の「イ」「ロ」は各一の句なり。

(イ)　これは梅の花だ。

(ロ)　野には雲雀の聲かまびすし。

單語及び句といふ名稱は、話語に於いても文語に於いても等しく稱ふるものなりとす。上の例の(イ)は話語の例にして、(ロ)は文語の例なり。

問題一　文法とは何か。

二　單語とは何か。

三　句とは何か。

四　單語と句との關係如何。

練習一　次の文章を各單語に分解せよ。

一　松竹よく榮ゆ。

二　天はみづから助くるものを助く。

三　村の彼方に沈む日を見る。

四　なぎさの松に吹く風をいみじき樂と我は聞く。

練習二　次の文章に相當なる單語を補へ。

一　美濃○養老瀧○孝子の傳說○以て其の○天下に○○。

二　樺太にて○○有望○○は漁業にて、鰊鱒鮭鱈少からず○○。

三　水○方圓○器に○○、○は善惡の○に○○。

四　八幡太郎の風流は今に至る○○人々の○○○○所。

第二章　名詞

五　文法にては國語の性質に基づき、研究上の都合よりして單語をば幾つかの種類に分ちて說明することあり。

鳥居强右衞門は**奧平信昌**の**けらい**なり。

シベリアの**東部**に於ける**寫眞師**、**時計直し**は大概**日本人**なり。

栞の**花山吹**よりもうつくし。

虎の**足**には**猫**の**足**の如く**裏**に柔き**肉**あり。

氣候穩かにして**生活**に適せり。

國民たるものは**法令**を重んぜざるべからず。

上の例のうちにて、

鳥居强右衞門　奧平信昌　は人の名稱なり。

けらい　國民　は人の身分に關する名稱なり。

シベリア　は場所の名稱なり。

東部　裏　は位置に關する名稱なり。

寫眞師　時計直し　は人の職業の名稱なり。

日本人　は人種の名稱なり。

名詞

菜　山吹　は植物の名稱なり。
虎　猫　は動物の名稱なり。
花　は植物の體の一部の名稱なり。
足　肉　は動物の體の一部の名稱なり。
氣候　は天象に關する名稱なり。
生活　法令　はある事柄の名稱なり。

かくの如く、すべて、事物の名稱となれる單語をば一の種類となし、文法上之を名づけて**名詞**といふ、

名詞とは事物の名稱となれる單語なり。

問題一　文法にて單語を分類するは何故なるか。
二　名詞とは如何なるものか。
三　教室にて目に見ゆる事物をあらはせる名詞十をあげよ。
四　學校に關する名詞のうち形なきものをあらはせる名詞五をあげよ。

練習三　次の文章中の名詞を抽き出せ。

一　日章旗は白地に赤でかゝれてあります。
二　石垣に腰うちかけて足を垂れつゝ魚を釣る。
三　昌造は長崎の人父祖の業をつぎておらんだ語の通辯たりき。
四　國家の繁榮が貿易の盛運に基づく事の大なるはいふまでもなし。

練習四　次の文章に適當なる名詞を補へ。

一　從順は○○の第一の○○なり。
二　○に菊の○みごとにさけり。
三　富士山の○湖にうつりて○○甚うるはし。

四　漁船○につけば乘りたる○○は濱にとびおり○に○を入れて待ちゐたる人々と共に○に歸る。

五　朝夕清き○○中に於て呼吸運動の○○をなすべし。

第三章　數詞

數量

六　件なひ來る蝶**二つ**、あるひは先にまた後に。

この機械は**一つ**の金網と**數十**のロールとより成れり。

地球の表面の**四分の三**は海なりといへり。

上の文中の「**二つ**」「**一つ**」「**數十**」「**四分の三**」は數量の名稱となれるものなれば名詞の一種なり、文法にては之を普通の名詞と區別して**數詞**といふ。

七　上の數詞は事物を數ふるに用ゐるものなるが、こゝに

順序

數詞

又事物の順序を數ふるものあり。

明治**二十三**年十月**三十**日教育勅語を下したまふ。

富士山は內地**第一**の高峯たり。

二つめの大きなる繪を見よ。

の「**二十三**」「**十**」「**三十**」「**第一**」「**二つめ**」の類これなり。これらも亦數詞のうちなり。されば數詞には事物の數量をかぞふるものと事物の順序を數ふるものとありと知るべし。

數詞とは數量又は順序を數ふるに用ゐる單語なり。

問題一　數詞とは何か。

二　數詞には如何なる用ゐ方あるか。

三　順序を數ふるに用ゐたる數詞の例を三あげよ。

練習五　次の文の數詞が如何に用ゐらるゝかを說け。

一　四月三日親友二三と郊外に散策す。

二　習慣は第二の天性なり。

三　此度は本科一年に進級の由賀し奉り候。

四　若干の數あり。之に五を加ふれば二十となるといふ。

その數幾何なるか。

第四章　代名詞

八　汝は山に登りて兎を狩り、我は水に泛びて魚を釣る。

それはあんまりなおことばです。

あれとこれと違つて居る場合が少くない。

そこにをるは誰なるか。

彼も亦人物なるかな。

これらの文中にある

「我」は話をなせる人自身の名をいふことの代りに用ゐたる詞

「汝」は話の相手をさしてその名をいふ代りに用ゐたる詞

「これ」「それ」「あれ」は今話の中に出でをるある事物をさしてその名をいふ代りに用ゐたる詞

「彼」は話の中に出でをるある人をさしてその名をいふ代りに用ゐたる詞

「誰」は人をきめずに汎くさしてそれらの名をいふ代りに用ゐたる詞

「そこ」は話の中に出でくる場所をさしてその名をいふ代りに用ゐたる詞なり。

代名詞

この「我」「汝」「これ」「それ」「あれ」「彼」「誰」「そこ」の如き詞を一の種類として之を名づけて**代名詞**といふ。

代名詞とは事物をさしてその名をいふ代りに用ゐたる單語なり。

九　代名詞にては其のさし方によりて自稱對稱他稱の區別をなす。

自稱

對稱

他稱

自稱とは「我」「余」の類にして

對稱とは「汝」「君」の如きをいふ。

他稱とは「彼」「これ」「それ」「誰」の如く話の中にいでくる人又は事物をさしていふに用ゐるものをいふ。

自稱と對稱とは人若くは人に擬せられたるものに限れども、他稱は人にても事物にても場所にてもさしうるものなり。

定稱

不定稱

一〇　他稱は又そのさす事柄の定まれると定まらざるとによりて定稱と不定稱とに分つことをう。「これ」「それ」「かれ」「あれ」は**定稱**にして「たれ」「なに」「いづれ」は**不定稱**なり。

問題一　代名詞の種類をあげよ。

二　話の中にいでくる事物をさしていふ名詞四をあげよ。

三　場所の代名詞とは如何なるものか。

四　方角の代名詞四をあげよ。

五　對稱の代名詞をあげよ。

六　不定稱の代名詞とは何か。

練習六　次の文中にある代名詞を抽き出して、その用法を述べよ。

一　その人の許に行きて相談したまへ。

二　こゝに汝に似たる人物あり。

三　いづれも美術品の模範と稱せらる。

四　これ何の力ぞや。これ實に吾人が靈魂の力なり。

練習七　次の文に適當なる代名詞を補へ。

一　○○に川あり、○○○に山あり。

二　○○國に生れたるもの○○か忠を盡さざるべき。

三　○○美しき花は○○といふものか。

四　○○はあんまりなお詞です、○○○○も日本男子であります。

五　ある時○○は化學書を購ひ來り、熱心に○○を讀めり。

練習八　次の文中の太字にせる名詞を適當なる代名詞に改めよ。

一　おとうさん**次郎**も手傳ひませう。

體言
　名詞
　數詞
　代名詞
用言

二　はや上野に來りぬ。**上野**には櫻花正に盛りなり。

三　**パリッシー**は端然として竈の前を去らず。

四　**廣瀨中佐**は軍神と呼ばるるばかりの人傑なりき。

五　日本刀は武士の魂とぞいふ。我は**日本刀**を汝に贐とせむ。

第五章　體言と用言

一一　名詞と數詞と代名詞とはいづれも事物を代表するものにして文章組立の骨子となるものなり。之を總稱して**體言**といふ。

一二　體言に對して、何等かの說明をなして、文の組立にかくべからざる單語あり。之を**用言**といふ。

太平洋の沿岸には屈曲多し。
果肉は味甘く、香氣強し。
專ら學問を好み、德性を養ふ。
余はこの雜木林を愛す。
春の風ゆるやかにふく。
小川の水ものどやかに流る。
麒麟も老いては駑馬に劣る。
園に一株の梅樹あり。
楠木正成は忠臣なり。

上文中の「多し」「甘く」「強し」「好み」「養ふ」「愛す」「ふく」「流る」「劣る」「あり」「なり」は皆上にある事物につきて說明せるものにして用言なり。

用言とは事物の說明をなすに用ゐる單語なり。

一三　用言が事物の說明をなすには種々のしかたあり。

花の色美し。
公園はこゝにあり。
山のあなたに沈む夕日を見る。
小兒は犬と戯る。
事業を營むには資本を要す。

これらは下にありて說明をなす場合なれど、又

美しき花の色。
こゝにある公園。
甲板に立ちて我が見る山は次第に遠ざかりぬ。
犬と戯るゝ小兒。

資本を**要する**事業を營む。

の如く上にありて說明する場合もあり。さてこゝに注意すべきことは、

美し。	あり。
美しき、	ある、
	戲る。
	戲るる、
	要す。
	要する。

の如く下にありて說明するときと、上にありて說明するときとは語の形が、少しく變はることもあるなり。

一四 用言はかく、用ゐ方に種々あり、又その用ゐ方の異なるによりて、語の形に變化を生ずることあり。かくの如く變化するを文法上の詞にては**活用**といふ。活用の形は種々あるものなり。卽「美し」は「美しき」の外に

櫻の花は實に**美しく**見ゆ。

活用

美し
美しき
美しく
美しけれ

あり
ある
あら
あれ

み
みる
みれ

戲る
戲れ
戲るる
戲るれ

櫻の花は甚**美しけれ**ども果實はうまからず。

の如き形あり、「あり」は「ある」の外

若、公園に見るべきもの**あら**ば我に知らせよ。

公園には櫻**あれ**ども、既に花はちれり。

の如く「あら」「あれ」の二形あり。「見る」は上の場合にあげたる「みる」といふ形の外に

行けども〳〵絕えて山を**み**ず。

置く霜の白きを**みれ**ば夜ぞふけにける。

の如く「み」「みれ」の二形あり。「戲る」も亦「戲る」「戲るる」の外に

決してこの犬と**戲れ**給ふな。

終日この犬と**戲るれ**ども、あく事なし。

の如く「戲れ」「戲るれ」の二形あり。「要す」も「要する」の外に

要す
要せ
要し
要する
要すれ

若、資本を**要せ**ば、我汝に之を貸さむ。
君若、資本を**要し**給はゞ我相談にのらむ。
我は資本を**要すれ**ども借るを屑とせず。

の如く「要せ」「要し」「要すれ」の三形あり。かくの如く活用の種類は多しと知るべし。

問題一　體言とは何か。
二　用言とは何か。
三　用言の活用とは何をいふか。
四　用言の活用は一種なるか。
五　「美し」に似たる活用を有する用言なきか。
六　「要する」に似たる活用を有する用言なきか。

練習九　次の文中の用言をぬき出せ。

一　兄英語に達し、志望頗る高し。
二　花時の眺めことによし。
三　水晶は古より我國に産す。
四　番兵は捧銃の禮をなし、信號兵は君が代を吹奏す。
五　志ある者は事竟に成る。

練習一〇　次の文に適當なる用言を補へ。

一　予は日本の國民○○。
二　足尾銅山は日光の西南に○○。
三　空氣○○○景色も○○○ば、浴客年中たえず。
四　子供の○○○、足早く○○去るも○○○。

第六章　形容詞

一五　用言には種々の活用あり。文法上にてはこの活用の

動詞
形容詞

差別を基として用言をば動詞と形容詞との二つに分つ。上にあげたる「美し」の如く「し」と「き」と「く」と「けれ」とに活用する用言を**形容詞**といひ、その他を動詞といふ。

一六　形容詞はその意義よりいへば、多くは事物の分量、性質を説明するものなり。たとへば

長し、多し、重し、狹し、　（分量）
甘し、強し、よし、貴し、　（性質）
白し、黑し、赤し、青し、　（色合）
早し、遲し、急がし、煩はし、　（有樣）

の如し。又「無し」の如く事物の**存在せぬ**ことを説明する形容詞もあるなり。

一七　形容詞の活用は「**く**」「**し**」「**き**」「**けれ**」の四なれども、いづれも

「美はし」の類

一樣なるものにあらず。「美はし」の如きは

美はし　美はし**き**　美はし**く**　美はし**けれ**

となりて「美はし」を基として之に「き」「く」「けれ」を加ふるに「赤し」の如きは。

「赤し」の類

あかし　あかき　あかく　あかけれ

となりて「あか」に「し」「き」「く」「けれ」の添はるなり。かくの如く「美はし」の類には更に「し」を添へて「美はしし」といふことまれなり。

「如し」

「あし」「賤し」「樂し」の類はこれなり。

一八　人も樹木の**如く**教育によりて化成せらる。

咲きこぼれたる卯の花雪の**如し**。

塵の**如き**輕き物體を吸收す。

の「**如し**」は又一種特別なる形容詞にして事物をたとへて說

明するものなり。而これは「けれ」といふ活用を有せず。

「く」の音便

一九　形容詞の活用の「く」は音便によりて「う」となることあり。

蘆のびて川狭う(く)なりぬ。

地は青黒う(く)暮れ、人家の障子に燈火紅に見えそめぬ。

話語にても又かく「う」とすることあり。

實が熟すると味があまう(く)なります。

寒う(く)もなく暑う(く)もなく誠に心持のよい時です。

「き」「し」の音便

又「き」と「し」との活用は話語にては音便によりて專「い」となれり。文語にも時としてこの音便を用ゐることあり。

日本人のきつい(き)氣象を表した好い(き)標本である。

刻苦せずしてよい(き)事の成された例は決してない(し)。

話語の形容詞

わが國の農家には小なる者が極めて多い(し)。

されば話語にて「い」といふ形容詞の活用は文語にては「き」と「し」との二になるなり。

問題一　形容詞とは何か。

二　形容詞の活用は如何。

三　「如し」といふ形容詞の活用は如何。

四　形容詞は話語と文語とによりて活用上に差あるか。

五　教室内の事物の説明に用ゐらるべき形容詞十をあげよ。

練習一一　次の文中の形容詞を抽き出せ。

一　平野廣く農業盛なり。

二　泥炭は質輕くして褐色を呈す。

三　歌村のはづれよりは砂汀いと長し。

四　光なくのぼれる朝日水の上の月よりも白し。

五　氣候の相違かくの如く甚し。

練習一二　次の文に適當なる形容詞を補へ。

一　明礬は工業上用途甚だ○○○。

二　金は銀より價○○○○。

三　飲料水○○○○してこれをうること○○。

四　名は○○○○ども、實際は異なり。

五　その精神の○○○は軍人の模範といふべし。

練習一三　次の形容詞の活用をくづれざる形になほせ。

一　貴い位や特權を與へてその名譽を表彰せられた。

二　梅の木の下にて面白いものをみつけたり。

三　それは早うより心がけをる事なり。

四　時計の針には短かいものと長いものとあり。

動詞

動作

作用

有樣

五　各地より參詣する人甚だ多い。

第七章　動詞(一)　四段活用

二〇　さきに形容詞以外の用言は動詞なることをいへり。而、動詞には次の如く種々の意義を有するものあるなり。

讀む、　愛す、　養ふ、　走る、

等は目的ある動作をあらはす動詞なり。

鳴る、　流る、　咲く、　肥ゆ、

等は自然の作用をあらはす動詞なり。

劣る、　勝る、　似る、　死ぬ、

等は事物の有樣をあらはしたる動詞なり、又あり

存在

の如く事物の**存在**することをあらはしたる動詞あり。

なり

説明

の如く他の詞を伴ひて**説明**をなす動詞もあり。

二一　形容詞の活用は「く」「し」「き」「けれ」の四を出でざれども、動詞の活用には幾種類もあり。先「書く」といふ動詞は

父は手紙を**書く**。

我は既に手紙を**書き**終りぬ。

彼はまだ故郷への手紙を**書か**ず。

この筆にて字を**書け**ば見事になるべし。

の如く活用四あり。「著る」といふ動詞は

我は學校の制服を**きる**。

學校に行く時は和服を**きず**。

四段活用

一段活用

制服を**きれ**ば心自ら正しくなる。

の如く活用三あり。今この「書く」と「著る」との二語の活用を五十音圖に照してならぶれば

書	かki	かku	かke	ko
著	きki	きるkiru きれkire	ku	ke ko

の如く上につく子音が共に k にて同じけれど一方は五十音圖の四段にわたり、一方は五十音圖の一段にのみありて、たゞ別に「る」と「れ」との加はれるのみなり。かくの如くなれば、文法上にては五十音圖の幾段にわたれるかを目標として活用を區別して「書く」の如きは之を**四段活用**と名づけ「著る」の如きは之を**一段活用**と名づくるなり。而「きる」「きれ」の下の

「る」「れ」は段の中には算へ入れず。これらは文法研究上の便宜によれるにすぎず。

問題一　動詞とは何か。

二　教室内にある事に關して用ゐうべき動詞十をあげよ。

三　四段活用とは如何なるものか。

四　一段活用とは如何なるものか。

練習一四　次の文中にある動詞をぬき出せ。

一　聖德太子は用明天皇の御子なり。

二　よせくる浪は岸を打つ。

三　朱に交れば赤くなる。

四　松の間には二三の漁家も見ゆ。

五　教育の淵源亦實に此に存す。

練習一五　次の文章に適當なる動詞を補へ。

一　梅花○○、黃鳥○○○。

二　我が國はアジアの東方に○○、四面海を○○○。

三　志○○者は事竟に○○。

四　緣くらき家には人○○にて梅子を○○、畑には甘藷を○○○女○○。

五　食鹽はよく水に○○○鹹味を○○○を其特性と○。

練習一六　次の文中の太字にして示せる動詞は四段活用なるか、一段活用なるかを說け。

一　今年も鎌倉に**遊ぶ**事十日に**なり**ぬ。

二　**戰は**ずして**勝つ**。これを勝の勝と**いふ**。

三　春の夜の月は櫻の花を**照して**ゐる。

四　遠村近落の烟の悠々として天へ**上りゆく**を**見る**ど

とに心すなはち樂む。

第八章　動詞(二)　一段活用

二二　先に「著る」は一段活用なることをいへり。之に似たる「蹴る」といふ動詞ありその活用を按ずるに、

我等は今球を蹴る。

君早くその球をけやり給へ。

球を蹴れば運動になる。

の如し。今之を五十音圖に照してならぶれば

著　ka　きる きれ　ku　ke　ko

蹴　ka　ki　ku　ける けれ　ko

となりて同じく一段に活用すれども「著る」の方は中央より

「きる」
「ける」

上の段にて活用し、「蹴る」の方は中央より下の段にて活用す。文法上亦之を異なる種類として「著る」の如きをば上一段活用といひ、「蹴る」の如きをば下一段活用といふ。

上一段活用
下一段活用

二三　上の「著る」「蹴る」の如きは話語にても文語にても一段活用なれども、話語にて一段活用のものは文語にてもいつも一段活用なりといふべからず。たとへば「起きる」といふ動詞は話語にては次の如く一段活用なれども、

毎朝早く起き給へ。

朝早く起きる。

朝早く起きれば、心地がよい。

文語にては

毎朝早く起き給へ。

毎朝早く起く。

毎朝早く起くる人は必ず勤勉家なるべし。

朝早く起くれば心地よし。

の如くになりて、活用の數も多くなれり。これを五十音圖に照してならぶれば

話語	ka	起きる・きれ	ku	ke	ko
文語	ka	起き	起くる・くれ	ke	ko

の如くなる。この文語の活用の形をば文法上**二段活用**といふ。

「起きる」
「起く」
二段活用
文語の上一段活用

二四　されば、文語にての一段活用なる動詞は割合に少きものなり。普通文に用ゐる上一段活用の動詞は

（弓を）射る。　（大砲を）鑄る。　（衣服を）著る

（肉を）煮る。　（親に）似る。　（東京に）居る。

（兵を）率ゐる。（繪を）見る。（思ひ見る（惟）。考へ見る（鑑）。）

位にすぎず。又文語にて下一段活用として承認せられたるものは「蹴る」といふ一語のみなりとす。

文語の下一段活用

問題一　話語の一段活用の動詞は文語にては如何になるか。

二　文語にも一段活用ありや。

三　文語の上一段活用の單語を知れる限りあげよ。

四　文語の下一段活用の單語を悉くあげよ。

第九章　動詞（三）　二段活用

二五　さきに話語にて一段活用なる動詞の大部分は文語にては**二段活用**なることをいへり。而してその例として「起く」といふ動詞を擧げたり。之に似たる「受く」といふ動詞あり。

これは話語にては下一段活用なるものなるが、文語にては

彼は頗嚴格なる家庭教育を受けたり。

明朝出頭せよとの命令を受く。

國民が國家より受くる恩惠は甚大なり。

木々の露夕日をうくれば、きら〳〵として光を放つ。

の如くなる。これを「起く」の活用と比べて五十音圖に照して

ならぶれば、

「起く」	起	ka	おき	おく（おくる）	ke　ko
「受く」	受	ka　ki	うく（うくる）（うくれ）	うけ	ko

となりて、同じく二段に活用すれども、「起く」の方は中央より上の二段に活用し、「受く」の方は中央より下の二段に活用す。文法上亦之を異なる種類とし、「起く」の如きをば**上二段活用**

下二段活用

といひ、「受く」の如きをば**下二段活用**と稱す。

二六　かく話語の上一段活用は文語にては上二段活用となり。話語の下一段活用は文語にては下二段活用となれるもの少からず。文章を綴る時にそれらを一段活用として用ゐるは誤なり。

話語　文語
上一段（上二段）
下一段（下二段）

問題一　四段活用と二段活用との區別を説明せよ。

二　下二段活用と上二段活用との區別を説明せよ。

三　話語にて一段活用の動詞は文語にては如何になれるか。

練習一七　次の文中に太字にてしるせる動詞の活用は四段なるか、上二段なるか下二段なるかを説明せよ。

一　馬に**乘る**もあり、舟を**浮ぶ**るもあり。

二　或は朋友を**尋ね**、或は親戚を**おとづる**。

三　鯉跳つてまた水に**落つる**音石を**投ぐる**やうなり。

四　人の物を批判するにわが**好む**所を**譽むる**ものなり

五　主のためかばかりの怒を**忍びかぬる**汝とは**思はざ**りき。

六　潮はいよいよ川に**満ち**殘照を**浮べ**、青蘆の影を**載せ**、白き泡を**運び**漫々としてまさに板橋を**浸さ**むとす。

練習一八　次の文中に四段活用、上二段活用、下二段活用、上一段活用、下一段活用の動詞あらば、之を指示せよ。

一　行くままに大石次第にあらはれ來る。

二　あまり多くの果實を著くる枝は折る。

三　處々霜おりて谷川の邊にはや赤き梢も見ゆ。

四　實材とは社會に立ち立派に働き得るものをいふ。

五　心を用ゐ功を積み久しきに耐ふれば必ず成就の地位に到るべし。

活用の數と段の數

第十章　動詞(四)　三段活用

二七　四段活用、上二段活用、下二段活用には活用の數、各**四**づつあれども上一段活用と下一段活用とは活用の數**三**あるのみ。されば、活用には段の數の異なるものあると共に活用の數も亦一定せぬものなりと知るべし。

二八　今こゝに「**く**」(來)といふ語あり。こは話語にては

(來)　ka　**き**給へ　くる／くれば　ke　**こ**ぬ

の如く活用四なり。文語にては、

(來)　ka　**き**給へ　**く**(言ひ切る)　くる人／くれど　ka　**こ**ず

三段活用

の如く活用の數五なり。いづれも段の數は三なればかくの如きを文法上三段活用の動詞と稱す。而この「來」は加行に屬するが故に、特に加行三段活用といふ。これに屬する單語は「く」のみなり。

加行三段活用

二九　「要す」「愛す」の類は話語にては

要愛	[sa]	し	する人すれば	せ [so]

の如く活用の數四にして、文語にては

要愛	[sa]	し	する人すれば	せ [so]

の如く活用の數五なり。而して共に三段に活けり。文法上にてはこれを左行三段活用と唱へて上の「來」と區別す。

左行三段活用

三〇　文語の三段活用と話語の三段活用との違ひは文語にある「く」「す」といふいひ切りに用ゐる形が話語にてはなきやうになれることとなり。卽ち話語にては「くる」「する」を用ゐるなり。

三段活用に於ける文語と話語との違ひ

友人く。　友人がくる。

旅行す。　旅行する。

文章を書く時に、話語の爲に往々誤りをかくことあり。注意してこの誤を避くべし。

問題一　動詞の活用の段の數と活用の數とは一致するか。

二　三段活用の種類をあげよ。

三　加行三段活用の動詞をあげよ。

四　名詞、漢語等を動詞とする方法ありや。

練習一九　次の文中にある動詞の活用を說け、

一　人々追慕のため松を植ゑ、碑を建つ。

二　ふきくる風はやゝ寒し。

三　熱心に研究する時は學業日に進む。

四　老武者かとすれば鬢髪黒くして盛りと見ゆ。

第十一章　動詞（五）　變格活用

話語の四段活用　文語の四段活用

三一　話語にて四段活用の動詞は文語にても亦大抵四段活用なるものなるが、少しく異なるものあり。「死ぬ」「あり」「なり」といふ動詞これなり。

死ぬ

三二　「**死ぬ**」といふ動詞は話語にては活用四なれど、文語にては四段にわたりて六の活用を有す。

話語	死**な**ぬ	死**に**ました	死**ぬ**	死**ね**ども	
文語	死**な**ず	死**に**たり	死**ぬ**	死**ね**	死**ぬる**命　死**ぬれ**ども

變格

奈行變格活用

即同じく四段なれども「**る**」「**れ**」を加へたるを異なりとす。この故にこの動詞は四段活用中の一種の變形といふべきものなり。文法上かくの如きものを**變格**といふ。而「**死ぬ**」の活用は五十音圖の奈行に屬するが故に**奈行變格活用**と稱す。普通文に用ゐる奈行變格活用の動詞は「**死ぬ**」の一のみなり。

三三　「あり」「なり」も亦四段活用なれど、用法稍他の動詞と異なり。普通の四段活用は

書を讀**む**

魚を釣**る**

の如く、句の終りとなるにはいつも五十音圖の第三列なる**ウ**韻を以てするに「あり」「なり」は

ここに梅の樹**あり**。

これは梅の樹**なり**。

ありなり

の如く第二列なる**イ**韻を以てす。これその異なる點なり。之を名づけて**良行變格活用**といふ。良行變格活用

三四　「あり」は話語にては　文話　四段　話語

庭には大きな櫻の木がある　四奈行變格　四段　良行變格

の如く用ゐる故に變格にあらずして普通の四段なり。「なり」は用ゐずして、そのかはりに「である」を用ゐる。されば話語には奈行變格良行變格はなしと知るべし。

三五　動詞の活用にて最多く單語の屬せるものは四段にして、次は下二段なり。上二段は稍多けれど、上一段は甚少し。良行變格はいよ〳〵少く奈行變格加行三段下一段は一語

活用によりて動詞の數に多少あり

あるのみ。左行三段は元來「す」一のみなれど、之に名詞漢語を冠するときは多數の動詞をつくることを得。

問題一　動詞活用の種類をあげよ。

二　活用の數の四ある種類の活用は何か。

三　活用の數の六ある種類の活用は何か。

四　活用の數の五ある種類の活用は何か。

五　活用の數の三ある種類の活用は何か。

練習二〇　次の文中にある動詞の活用を指示せ。

一　何人もこれに耳をかさむとするものなし。

二　日暮門ともいふは日暮るゝまで見るとも厭かぬが故なり。

三　落ちくる水は白布を空にかけたるこゝちして、雷ひびき、電くだけ、飛びちる泡は谷にみつ。

四　廿萬の兵を率ゐ平壤を拔きて潮の如く王城に迫り來る。

練習二一　次の文に指定したる活用の動詞を補へ。

一　紅海を過ぎてスイズ運河に(四段)

二　此河を(四段)汽船の數は(下二段)もあへぬばかりなり。

三　商業界に大激變を(下二段)その常態を(四段)は戰爭より甚しきものなし。

四　この室には種々の物を(左行三段)て人の(上一段)にまかせたり。

五　驚きて枕上なる紐刀おつ(四段)障子おし(四段)ば母君も(上二段)給ひぬ。

第十二章　助動詞

三六　牛馬を使役して(決定)人の勞を助けしむ。(使役)

旗の青きは涙の和ぎたる(完了)を知らずする(使役)なり。

貝はうち寄せられて(受身、決定)(決定)砂の上にあり。

いざ波と今日も戰はむ。(豫定)

こを拜するに涙おちきて(決定)とどまらず。(打消)

楠木正成は忠節なる人なりき。(回想)

日影はやうやくわがもとに來りぬ。(完了)

誇るべき(適當)事にはあらざれ(打消)ども父母に見せ奉りたき(希望)事なり。

彼は殆完全に日本國民の思想を代表したり。(完了)

たゞ專念につとめ勵むべし。(適當)

助動詞

かばかりの事驚くにも當る（打消の推量）まじ。

の「て」乃至「まじ」の如く、動詞の活用の下につきて、更にその意義を助くる一種の語あり、かくの如きものを文法上、助動詞といふ。而これの附屬したる時はこれと上の活用とは一體となりて離れざるものとす。この故に助動詞附屬せる場合にはその附屬せるまゝにて一の動詞と見るなり。

助動詞の活用

ず、ぬ、ね、

三七　助動詞もまた用言の如く活用することあり。而、文語と話語との間に差あることあり。

三八　話語　行かずとよろしい　行かぬ（ン）　行かねばならぬ。

文語　行かず　行かぬ時　行かねば知らず

「ず」は右の如く話語と文語とによりて用ゐ方異なれども、活用は大抵似たり。

「き」

三九　「き」といふ助動詞は

かく宣ひき。　かく宣ひしよ。　かく宣ひしかば。

の如き活用を有す。この助動詞は話語には用ゐず。

形容詞に似たる活用の助動詞

「たし」

「べし」

「まじ」

四〇　「ず」「き」は特別の形を有するものなれども、多くの助動詞は形容詞若くは動詞に似たる活用をなせり。形容詞に似たる活用ある助動詞は「たし」「べし」「まじ」等なり。

學びたし　學びたく思ふ　學びたき事　學びたけれど

見ゆべし　見ゆべく思はる　見ゆべき筈　見ゆべけれど

聞くまじ　聞くまじく候ふ　聞くまじきなり　聞く

まじけれど

四一　形容詞に似たる助動詞のうち「たし」は話語にては「たい」となりて次の如き活用形となり

見**たい**　見**たく**思ふ　見**たけれ**ば

見**たう**ございます

「まじ」は

世界中で日本ほど螢を珍重する國はある**まい**。

の如くなりて活用形一のみとなり、「べし」は話語にては用ゐぬやうになれり。

四二　動詞に似たる活用の助動詞には下二段活用の形を有するものと良行變格活用の形を有するものとあり、良行變格の形を有するものは「ざり」「たり」等なり。

たい、たく、たう、たけれ、

まい

「べし」

良行變格に似たる活用の動詞

我知ら**ざら**む　知ら**ざり**き　知ら**ざる**事　知ら**ざれ**ども。

花咲き**たら**ば　咲き**たり**　咲き**たる**時　咲き**たれ**ば

四三　「たり」といふ助動詞は話語にて

花が咲い**たら**　花が咲い**たり**する時は

の如く、形も、用ゐ方も大にかはれり。「ざり」といふ助動詞は話語には用ゐず。

四四　下二段活用の形を有する助動詞は「す」「さず」「しむ」「る」「らる」等なり。而、これらのうち「しむ」は話語には用ゐず。その他は話語にては下一段活用の形とせり。

さら〳〵と筆を走ら**せ**たり　筆を走ら**す**　筆を走ら**する**人　走ら**すれ**ば

「ざり」

「たり」

たたらたり

下二段に似たる活用の助動詞

「す」

「さす」　一同を集めさせたり　一同を集めさす　一同を集めさする使　集めさすれば

「しむ」　實習せしめむ　實習せしむ　實習せしむるの利益　實習せしむれば

「る」　勵まされたり　勵まさる　勵まさるゝ故に　勵まさるれば

「らる」　何とも仰せられず　かく仰せらる　仰せらるゝ事　かく仰せらるれば

「て」「む」(ン)「ぬ」「き」

四五　「て」「む」「ぬ」といふ助動詞は普通文にて用ゐるはたゞ一の活用のみなり。

明朝門出して故郷に歸らむと早くも寢に就きぬ。

四六　文語の「き」「ぬ」といふ助動詞は話語には用ゐず。この場合には大抵「た」を代用するなり。

「ぬ」　かく仰せられき　かう仰せられた

花咲き初めぬ　花が咲きはじめた

「む」　四七　文語の「む」といふ助動詞は話語にては「う」「よう」といふ語にかはれり。

訪問せうが宴會に臨まうが上手に立廻る。

救命浮標に手を掛けようとして居る。

「う」「よう」

四八　文語になくして話語にのみ用ゐる助動詞あり。

誰れを訪ねても家には居ない。皆田に出てゐる。

この「ない」は話語の形容詞に似たる活用を有せり。

居ない　居なくなる　居なければ　「ない」

四九　一の助動詞を附屬せしめたるのみにて意義不十分

なる時はその下になほ他の助動詞を附することあり、次の例の如きはこれなり。

たゞ人口の多きを以て誇るべからざるなり。

かばかりの怒を忍びかぬる汝とは思はざりき。

丘上の老松は行平の月見の松と名づけられたり。

早く母に別れ祖母の手に教育せられたりき。

べからざる
ざりき
られたり
られたりき

問題一　助動詞とは何か。

二　助動詞は如何なる作用をなすか。

三　助動詞の活用を説明せよ。

四　下二段に似たる活用ある助動詞をあげよ。

五　特別の形を有する助動詞をあげよ。

六　話語と文語とによりて活用異なる助動詞をとふ。

七　話語の助動詞「た」にあたる文語の助動詞如何。

八　話語にのみある助動詞は何か。

練習二二　次の文中の助動詞を抽き出し、如何に活用すべきかを考へよ。

一　人馬共に氷上に滑り倒れてまた起つ能はざらんとす。

二　警戒を嚴にしてひたすら乘ずべき機を覗ふ。

三　柳處處にありて末は霞に包まれたり。

四　家貧しければ高等の教育も授けられず、讀書算術の初歩を學ばせたる後はいづれも自活の途に就かしめぬ。

練習二三　次の文に適當なる助動詞を補へ。

一　其の利害辯を待○して明なる○○。

二　願はくは陛下の赤子をして餓ゑ○○○なかれ。

三　面くすぼり身體疲れ、この世の人とも見え○○○。

四　日本臣民は法律に定め○○○○官の裁判を受くるの權を奪は○○ことなし。

練習二四　次の話語を文語に直せ。

一　啞生の一年生を教へるのは女教師である。

二　窮屈だから出ようとするが出られない。

三　日本人のきつい氣性を表した好い標本ではありませぬか。

四　嗚呼これがわが國の學生の公德かと獨り慚愧に堪へなかつた。

第十三章　助詞

五〇　體言と用言とは文の組立に必要なるものなるが、これのみにて十分に意味をあらはすこと能はざる場合あり。たとへば

我　汝　愛す。

といひたるのみにてはその意味十分に明ならず。今之を

我は汝を愛す。

汝は我を愛す。

とせば、その意明瞭になり、愛する人と愛せらるゝ人との關係明になるべし。かくの如く關係をあらはす爲に他の單語を助くる單語を助詞と稱す。

五一　上の例は體言と用言との關係を助けたる助詞の例なれども、助詞は又

彼岸の中日なれば近在の老若男女所在に寺詣して歸るもの織るが如し。

この文中の「の」の如く體言と體言との關係を示すもの「ば」の如く用言に附屬して下の文との關係を示すもの等あり。上文中の「に」「が」も亦助詞なり。

五二　助詞は二以上重ねて用ゐることも少からず。

機關砲とは如何なる砲なるかを知れりや。

況んや大雨の急に降り下るに於いてをや。

これは説明するまでもなきことなり。

彼の善行はこれのみにあらず。

五三　助詞には又その用ゐる文字と一致せぬ發音をなすものあり。上にあげたる「は」(ワ)「を」(オ)の如きこれなり。

「て」

「でも」

船さへあれば地球上どこの果へでも行かれる。

の「へ」「さへ」もまた然り。これらは假名遣をあやまらぬやう、注意すべし。

五四　助詞は話語も文語も大抵似たり。しかれども又異なる所あり、話語の「で」「でも」は文語になき助詞なり。

天河屋儀平は男でござる。

日章旗はわが大日本帝國の國旗であります。

一船でも出て來たら目に物見せてくれるぞ。

問題一　助詞とは何か。

一　助詞の大切なることを説け。

三　體言に附屬せる助詞の例をあげよ。

四　用言に附屬せる助詞の例を示せ。

練習二五　次の文中の助詞を抽き出せ。

一　伯林より程遠き地に旅行して、ある家に宿りぬ。
二　何が何やら一向わからぬ。
三　わが德を進め、知を弘むるよすがともなるものなり。
四　この塀の内が卽ち我が草庵の庭である。
五　汝は藤樹先生の家來筋のものなるか。

練習二六　次の文中に適當なる助詞を補へ。

一　余○幼少○折、一家○靜岡○移りぬ。
二　汝等○信ずる㊙如く、汝等○なるべし。
三　われ㋐才子○いふ㋒未だわれ○つくさず。
四　我家㊙○㊙來らざれ㋒既に隣家㋐㋒來りぬ。
五　一度○かく○思ひし㋐また改めたり。

第十四章　副詞

五五　文の説明をなすは用言の役目なるが、この用言のみにては十分に説明をなしはたすことを得ざる場合あり。その時にはこの説明の意義を明にせむが爲に副ふる單語あり。

あゝ諸子は既にことの意を悟りたらむ。
これを全國の上より觀ればその利害甚だ大なり。
その雇人二萬五千人の多きを算すといふ。豈にまた偉ならずや。
父は醫を業としかたはら商業を營みたり。
何はさておきまづ學問に心がくるを要す。
椿はぽたりぽたり落ちて地も紅なり。

北風飄々鬢を吹きステッキ持つ手もかゞまむとす。

谷は田にて概ね細き流れあり。

もし假睡せば夢もまた綠ならむ。

薩摩大隅日向は頗る暖なる國なり。

上文の「既に」「甚だ」「豈に」「かたはら」「まづ」「ぼたりぼたり」「飄々」「概ね」「もし」「また」「頗る」は皆下なる縱線を施せる語の說明を一層明かにせむが爲に副へたる單語なり。かくの如き單語をば副詞と名づく。

副詞とは說明を明瞭にせむが爲に副ふる單語なり。

問題一　副詞とは何か。

二　副詞は如何に用ゐらるゝか。

三　勉强と運動とに關して用ゐうべき副詞の例各三をあげよ。

練習二七　次の文中の副詞を指し示せ。

一　やがて日は紅の球を搖して山に落ちぬ。

二　もし此事誠ならむには惜むべき事なり。

三　これまた都會の人の羨む樂なり。

四　遂に路窮りてもはや行くべからずと思はる。

五　しかも山雲を得てますますその美を加へ、いよいよその大を添ふ。

練習二八　次の文中に適當なる副詞を補へ。

一　巴里の遊園は倫敦のに比ぶれば、㊀㊁狹く、數も㊂㊃少し。

二　その定めなきことと㊄㊅浮雲の如し。

三　㊆㊇世の模範たらむには心術を正しくすべし。

四　職務に從事するには㋑㋺時刻を定めおくを可とす

五　地球上に奇觀多しといへども、㋩㋥ナイヤガラの瀑布にすぎたるはなからむ。

第十五章　接續詞

五六　(イ)　欅は建築及び器具の料に賞用せらる。

(ロ)　見わたす限り山又山。

(ハ)　ますます學問を勵み、又其の身の行を慎めり。

(ニ)　庭はたゞ三坪。誰かいふ、狹くして且つ陋なりと。

上の例の「及び」「又」「且つ」は上下の語を連ね(イ)(ロ)、又文と文との間に入りて、その意義を結び付くる(ハ)(ニ)作用を有するものなれば、文法上これらを特に一種類として接續詞と稱す。

接續詞とは上下の語又は文の意義を結びつくるに用ゐる單語なり。

問題一　接續詞とは何か。

二　語を連ぬる接續詞をあげよ。

三　文の意義を結びつくる接續詞をあげよ。

練習二九　次の文中の接續詞を指示せ。

一　これすなはち名高き名古屋城なり。

二　樟腦は香料防臭劑竝びに醫藥等として用ゐらる。

三　この種族は專ら農耕をつとめ又漁獵にも從事せり。

四　霞か雲かはた雪かとばかり匂ふ山櫻。

練習三〇　次の文に適當なる接續詞を補へ。

一　動もすれば離島に吹き流され、㋩㋥は波風に碎かれて死ぬるもあり。

二　岩石は大抵二種三種㊀㊁十數種の鑛物にて成れり。

三　この地民屋みな脆弱にして㊀㊁粗なり。

四　書を讀み㊀㊁字を寫す。

第十六章　感動詞

五七　あゝわが思ひは足り、わが心は樂し。

いざあすは故郷へ歸らむ。

日影ゆらりと宵寢の鳥のはつと亂れて**あはや**磯櫻の花ちりぢりと。

すはや敵こそ攻めきたれ。

上の文中にある「あゝ」「いざ」「あはや」「すはや」は感動したる時の氣持をあらはす自然の聲なり。これらは文の組立の上には

大なる關係なきものなり。かくの如き單語をば文法上**感動詞**といふ。

五八　以上にて單語を分類し終れり。始めより述べし所を概括すれば次の如し。

名詞
代名詞
形容詞
動詞
助動詞
助詞
副詞
接續詞

品詞

感動詞

かくの如く分類したる語をば品詞と稱するなり

問題一　感動詞とは何か。

二　各自平常用ゐる所の感動詞五をあげよ。

三　品詞とは何か。

練習三一　次の文に適當なる感動詞を加へ。

一　㊀㊁㊂柴の戸音づれむ友もがな。

二　㊀㊁目にも見せてくれむ。

三　㊀㊁諸共に野邊山邊に。

四　㊀㊁㊃一大事こそ起りたれ。

練習三二　次の文の各單語を分類せよ。

一　國を治むる本は家を齊ふるにあり。

二　通ふ汽船の笛の音も凉しく波にひゞくなり。

三　あゝ青年老い易く學成り難し。

四　大津は琵琶湖の南に位し山水の勝に富む。

第十七章　連語及び句

五九　月下に奏する瀏亮の曲。

檢非違使等の武職。

徐に歩む。

遙に高し。

わが隣に住む。

玆に示したるものは體言と體言とを連ね、體言と用言とを連ね、或は副詞と用言とを連ね、又その間に助詞を加へなど

して夫れ〳〵の意味をあらはしたるものなり。これらは多くの單語を集めて一の連續したる語をなせども、未完全に思想をあらはすものにあらず。かくの如きものを文法上**連語**といふ。

連語

六〇　月清し。
　　花咲く。
　　犬走る。
　　人歩む。

これらの例は單語の數も少く、形も短けれども、完全に思想をあらはしたるものなれば、たゞの連語にあらず。かくの如きものを文法學にては**句**と稱す。

句

六一　我等の日常用ゐる文章談話は一若くは數多の**句**に

句の組立

て成立するものなり。**句**を組立つるには體言を上におき用言を下におきて説明せらるる語をば**主語**といひ、主語に對して説明せしむるものなり。而、その上にありて説明をなす用言をば**述語**といふ。主語と述語とは句の組立に必要なるものなり。然れども我等の實際使用せる文は主語と述語とのみのものは極めて稀なりとす。

主語
述語

　　月いづ。　　日は入りぬ。
　　風すゞし。　　雨やふらむ。

これらの文の「月」「日」「風」「雨」は主語にして「いづ」「入りぬ」「すゞし」「ふらむ」は述語なり。助詞及助動詞は補助成分として主語述語の一部となす。

補助成分

六二　述語たる動詞が「なり」なる時は上に來る語と合せて

「なり」

一の述語となす。

市は自治團體なり。

日本軍は武勇なり。

我が身體はすこやかなり。

補助たる語と用言

六三　述語たる用言が補助たる語を要するものなる時はその語と用言とをあはせて一の述語となす。

景色繪の如し。

五重塔天に聳ゆ。

老媼茶をすゝむ。

學生教師より教をうく。

人々神山へ向ふ。

副詞

六四　又說明を一層明にせんが爲に副詞を加ふることあり。前後の關係を密にせむ爲に接續詞を加ふることあり。感情を强めむが爲に感動詞を添ふることあり。されど、これらは句の組立には重要なる關係なきものなり。

接續詞

感動詞

景色あたかも繪の如し。

書を讀みまた字を寫す。

あはれ、日は入りぬ。

問題一　連語とは何か。

二　句とは何か。

三　句の組立に必要なるものは何か。

四　述語になるものは如何なる單語なるか。

五　說明を一層明にせむには述語の外に何を要するか。

練習三三　次の各項が連語なるか句なるかを判定せよ。

一　日影まちえし草葉の色。
二　五月雨晴れたり。
三　菅笠かぶりたる女。
四　石榴の花、火よりも赤し。
五　孝は百行の本なり。

練習三四　次の話語をば句になほしみよ。

一　崖上にある茶屋。
二　ほの〴〵と白みゆく東の空。
三　鐵瓶に生ずる湯垢。
四　誠に交通に便利なる鐵道。
五　淡路の島山を籠むる春霞。

練習三五　次の文中の主語述語を指示せよ。

一　微雨あり。風亦起る。
二　君は何を學びたるか。
三　こはまことに大事なり。
四　鳥聲耳にかまびすし。
五　大井川その側を流る。

第十八章　句の組合はせ

六五　花紅なり。
月清し。
小兒犬と戯る。
我庭に梅を植う。

以上の例は皆句なるが、主語と述語との結び付けの唯一回

句の定義

なるを見るべし。この故に句を更に次の如く定義す。

一の句とは主語と述語との結び付けの一回なるものをいふ。

單文

六六　(イ)　花咲く。　鳥なく。

(ロ)　花咲き、　鳥なく。

この(イ)(ロ)を比較せよ(イ)は二句互に獨立なるに(ロ)は二句を合して一の文となす。かくの如く文の組立によりては一の句より成るものあり。多數の句を合してなせるものあり。かくて一の句にてなる文を稱して**單文**といひ、多數の句よりなるものと區別す。

六七　(イ)　花咲き、　鳥なく。

(ロ)　花咲け**ば**、　鳥なく。

重文
合文

この二文を比較せよ。共に二の句よりなり、中なる單語も頗似たれども、その二句の關係は異なり。(イ)は二の句を唯重ねたるにすぎざれども、(ロ)は二の句相合して一の新しき意ある文をなせり。(イ)の如きを**重文**といひ、(ロ)の如きを**合文**と名づく。

重文

六八　人は歩**み**、　犬は走る。

犬は走**り**、　人は歩む。

上句
下句

かく單文たる二の句を重ねて重文とする時には上の句の述語の形をかへて重ぬるなり。而、上の句をば**上句**といひ、下の句をば**下句**といふ。

合文と助詞

六九　重文をつくるには上の句の述語の形をかふるにて足れども、合文をつくるには上の句の述語に助詞を添へざ

るべからず。この爲に用ゐらるゝ助詞は「ば」「ど」「ども」「とも」「が」「に」「を」等なりとす。合文にありては助詞の附屬せる句を**伴句**といひ、下なる句をば**主句**といふ。

伴句
主句

花は咲けど**も**鳥は鳴かず。
花は咲く**とも**鳥は鳴かざらむ。
花は咲く**が**鳥は鳴かず。
花は咲く**に**鳥は鳴かず。
花は咲く**を**鳥は鳴かず。

問題一　一の句とは如何なるものか。
二　單文とは何か。
三　重文とは何かその各句は何といふか。
四　合文とは何か。
五　合文は如何にして生ずるか、その各句は何といふか。

練習三六　次の文は單文なるか、重文なるか、合文なるか。

一　彼等もし望まば何人も容易になしうべし。
二　印度は遂に英に歸し、米國は英領と合衆國とに分れぬ。
三　新しき生活ははじまり、烈しき格闘はひらかれたり。
四　綠玉碧玉頭上に蓋を綴れば、わが面も靑し。

練習三七　次の各單文を結合して指定せる文になほせ。

一　風吹く。雨ふる。浪高し。（重文）
二　庭の花咲く。我汝に通知せむ。（合文）
三　彼甚工夫をこらしたり。未だその效なし。（合文）
四　農は耕種す。工は製造す。商は交易す。（重文）
五　ことば多し。品少し。（合文）

練習三八　次の文の各單語を分類せよ。

一　舟の進むこと矢よりも早し。

二　そのおもしろさ我は殆んど名狀すべき言葉を知らず。

三　國の將に興らんとする必ず禎祥あり。

四　如何にせんたのむかげとてたちよれば、なほ袖ぬらす松の下露。

五　露人のこれを見て、舌を捲いて驚嘆したりといふものまことに故ありといふべし。

師範教育　文法教科書卷一　終

附錄

師範教育文法教科書卷一表解

一、文法學の問題
- 聲音……言語
  - 文語
  - 話語
  - ……國語
- 文字……文章……國文

二、單語と連語と句との關係
- 一、句の組立に要する一つ一つの語……單語
- 二、單語を集めて一の思想をあはらしたるもの……句
- 三、單語を集めて一の連續したる語をなせども未完全に思想をあらはさぬもの……連語

一、名詞……事物の名稱となれる單語
二、數詞……事物の數量をあらはす單語
三、代名詞……事物をさしてそれの名をいふ代りに用ゐる單語
- 體言

四、形容詞
- 一、活用……「く」「し」「き」「けれ」
- 二、意義……分量、性質、色合、有樣、非存在

五、動詞
- 一、活用……五十音圖の縱の行のうちに活用す
- 二、意義……動作、作用、有樣、存在、說明
- 用言

- 三、單語の種類
  - 六、助動詞
    - 一、用法
      - 一、動詞に附屬してその意義用法を助く
      - 二、獨立しては用ゐられず
      - 三、助動詞に更に助動詞をつくることあり
    - 二、活用：用言の如く活用あり
  - 七、助詞……關係をあはらす爲に他の單語を助くる單語
  - 八、副詞……說明を明瞭にせんが爲に副ふる單語
  - 九、接續詞……上下の語又は文の意義を結びつくるに用ゐる單語
  - 十、感動詞……感動したる時の氣持をあらはす自然の聲
- 四、數詞
  - 一、事物の數量をかぞふるもの
  - 二、事物の順序をかぞふるもの
- 五、代名詞
  - 一、自稱……話をする人自分の名の代り
  - 二、對稱……話の相手の名の代り
  - 三、他稱
    - 一、定稱
      - 一、話の中に出てくる一定の人の名の代り
      - 二、話の中に出てくる一定の事物の名の代り
      - 三、話の中に出てくる一定の場所の名の代り
      - 四、話の中に出てくる一定の方角の名の代り
    - 一、話の中に出てくる不定の人の名の代り

- 二、不定稱
  - 二、話の中に出てくる不定の事物の名の代り
  - 三、話の中に出てくる不定の場所の名の代り
  - 四、話の中に出てくる不定の方角の名の代り
- 六、形容詞
  - 一、「美はし」の類　「き」「く」「けれ」と活用す
  - 二、「赤し」の類　「し」「き」「く」「けれ」と活用す
  - 三、「如し」……「けれ」の活用なし
  - 四、音便
    - 一、「く」…「う」
      - 一、文語にもあり
      - 二、話語にもあり
    - 二、「き」…「い」
      - 一、主として話語に用ゐる
    - 三、「し」…「い」
      - 二、時として文語にも用ゐる
- 二、上一段活用
  - 一、四段活用
    - 一、活用の數……四
    - 二、五十音圖の「ア」「イ」「ウ」「エ」の四段に活用す
    - 三、動詞中所屬單語最多し
  - 二、五十音圖の「イ」の一段に活用す
  - 三、「る」「れ」の活段あり
  - 四、文語にては普通に十語以内を用ゐるのみ

七、動詞

三、下一段活用
- 一、活用の數……三
- 二、五十音圖の「エ」の一段に活用す
- 三、「る」「れ」の活段あり
- 四、文語にては「ける」の一語あるのみなり

四、上二段活用
- 一、活用の數……四
- 二、五十音圖の「イ」「ウ」二段に活用す
- 三、「る」「れ」の活段あり
- 四、所屬單語の數は下二段につぐ
- 五、話語にては上一段に活用す

五、下二段活用
- 一、活用の數……四
- 二、五十音圖の「エ」「ウ」の二段に活用す
- 三、「る」「れ」の活段あり
- 四、所屬單語の數は四段につぐ
- 五、話語にては下一段に活用す

六、加行三段活用
- 一、活用の數……五
- 二、五十音圖の「イ」「ウ」「オ」の三段に活用す
- 三、「る」「れ」の活段あり
- 四、所屬單語は「く」の一語のみなり
- 五、活用の數……五

七、左行三段活用
- 一、活用の數……六
- 二、五十音圖の「イ」「ウ」「エ」の三段に活用す
- 三、「る」「れ」の活段あり
- 四、所屬單語は「す」の一のみなれども之に名詞漢語等を冠するときは多數の動詞をつくることを得

八、奈行變格活用
- 一、活用の數……四
- 二、五十音圖の「ア」「イ」「ウ」「エ」の四段に活用す
- 三、「る」「れ」の活段あり
- 四、所屬單語は普通文に用ゐるは「死ぬ」の一語のみなり
- 五、話語にては普通の四段活用に同じ

九、良行變格活用
- 一、活用の數……四
- 二、五十音圖の「ア」「イ」「ウ」「エ」の四段に活用す
- 三、いひ切りの場合に普通の四段とことなり
- 四、所屬單語は「あり」「なり」等なり
- 五、話語にては「あり」は普通の四段にして「なり」は亡びたり

一、特別の形を有するもの
- 一、ず、(ぬ、ね)
- 二、き、(し、しか)

二、形容詞に似たる形のもの
- 三、たし
- 四、べし
- 五、まじ

八、助動詞の活用

- 三、良行變格に似たる形のもの
  - 六、けり
  - 七、たり
- 四、下二段活用に似たる形のもの
  - 八、す
  - 九、さす
  - 十、しむ
  - 十一、る
  - 十二、らる
- 五、普通の文にてはたゞ一の活用のみ用ゐるもの
  - 十三、て
  - 十四、む
  - 十五、ぬ

九、話語の助動詞

- 一、ぬ（ず、ね）
- 二、たい（形容詞に似たり）
- 三、まい（活用一のみ）
- 四、せる（下一段活用に似たり）
- 五、させる（同　上）
- 六、れる（同　上）
- 七、られる（同　上）
- 八、た（たら、たり）
- 九、う（活用の一のみ）
- 十、よう（活用一のみ）
- 十一、ない（形容詞に似たり）

十、助詞

- 一、用法
  - 一、體言に附屬するものあり
  - 二、用言に附屬するものあり
  - 三、重ねて用ゐることあり
- 二、假名遣
  - 一、は（「わ」とかくべからず）
  - 二、を（「お」とかくべからず）
  - 三、へ（「え」とかくべからず）
  - 四、さへ（「さえ」とかくべからず）
- 三、文語になくして話語にのみあるもの
  - で
  - でも

十一、句の組立

- 一、主要なるもの
  - 主語：體言
  - 述語：用言
- 助動詞

二、主要ならぬもの
- 助詞
- 副詞
- 接續詞
- 感動詞

十二、文の種類
- 一、單文……一の句にてなれるもの
- 二、重文……二の句を重ねたるもの
  - 上句
  - 下句
- 三、合文……二の句を合せたるもの
  - 伴句
  - 主句

文部省檢定濟

明治四拾參年拾貳月　壹　日印刷
明治四拾參年拾貳月　五　日發行
明治四拾四年　貳　月拾壹日訂正再版印刷
明治四拾四年　貳　月拾五日訂正再版發行

定價
卷一　金貳拾參錢
卷二　金貳拾五錢
卷三　金貳拾五錢

不許複製
3 2 1
師範教育
文法教科書

著作者　山田孝雄
發行者　大葉久吉　東京市日本橋區本石町三丁目十七番地
發行者　吉岡平助　大阪市東區備後町四丁目三十七番地
印刷者　青木弘　東京市市谷加賀町一丁目十二番地

發行所　東京市日本橋區本石町三丁目
大阪市東區備後町四丁目　寶文館

印刷所　株式會社秀英舍